

札

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和二年一月二十八日印刷納本

昭和二年二月一日發行
(毎月一回
一日發行)



第六十九號

札幌 山とスキーの會 發行

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號九十六第



記事

スキー遠距離飛躍とその力學に就て

R. Strammann
青木三郎抄譯
〔一〕

登山史上の黄金時代

大島亮吉
〔一二〕

獨乙に於けるスキーの言葉

J. Schneider
本田治吉譯
〔一八〕

暑寒別岳へ

山口健兒
〔二五〕

彙報抄録

スキーテクニツクの研究

伯林麻生武治
〔一〕

寫眞版

Geländesprung

上ホロカメトツク山附近

和辻廣樹

昭和二年二月發行



Ed. Schmitt

スキー—遠距離飛躍と其力學に就て

R. Straumann

青 木 三 郎 抄 譯

我國のスキージヤムピングは外國書籍及び寫眞によつて得た知識をもととして多くの先輩諸氏によつて研究せられ最近
は目覺ましい發達をとげた。一九二六年三月村本選手により二八米（シルバーシャンツエ）のレコードが作られた。又本
シーズンには札幌市設の大シャンツエが作られ今や世界のレベルに馳せ登らんとして居る。

國際スキー大會では近年四〇米、五〇米で年と共に其レコードが増大しつゝある。

遂に一九二六年ノールウエーのスキー大會で番外ジヤムプに於て七〇米五〇（コングスベルグシャンツエ）のレコード
が、ルード選手（Signold Raud）によつて作られた。こうした遠距離飛躍に於て必然的に生じ來るランデングの際の壓
力（Druck）をいかにしてたえ得たかは吾々は想像する事が出来なかつた。又最近の外國一流選手達の寫眞を見ると非常に
前に傾き過ぎて居ると思はれるもの多く、又タムス選手（Julin Thams）の如く腰をくの字に折つたものもある。何故に前
に傾き過ぎてたと思はれる様な姿勢、又はくの字なりに曲つた姿勢が優れて居るのかは實際飛ぶ所を見る事の出来ぬ我々は
疑問をいだかすには居られなかつた。

Ski (Jahrbuch des Schweiz Ski-Verbandes) 1926. の卷頭に R. Straumann 氏が書かれた Vom Ski-Walsprung und seiner
Mechanik. を讀んでいさゝか世界一流選手のスタイルが點頭かれる様な氣がしたのである。で以下同氏の論説にしたがつ

て其力學を書かうと思ふが、もう一言云はせてほしい。と云ふのは解り切つた話ではあるがスキージャムピングも他のスポーツと同じく理論によつてではなく熟練によつてのみ上達し得るものである。然し理論は熟達への捷徑である。幸にこの記事が今や正に世界の舞臺に雄飛せんとしつゝある我ジャムパー諸兄の参考ともならば満足の至りである。

Yom. Ski-Weisprung und Seiner Mechanik

最近數年間にスキージャムピング特に遠距離飛躍は意外の進歩をこけた。年と共に益々遠距離レコードが作られる。觀察者の立場から見ると遠距離ジャムブは中等以下のジャムブに比較して或る他の規則が決定的に働いて居ると思はれる。吾々は遠距離ジャムブではスキーがフライトでは絶対にフルーグバーン (Euchain 飛躍曲線) の中に存せねばならぬ事は良く見て居る所で、もしそうでなかつたらひどい平衡障害を起すからである。

或る二三のジャムパーはシャンツェから非常に軽く飛び出し靜かな飛行をして遠距離に達し、あたかも羽毛の如く輕ろやかに立つのは良く吾々の見て居る所である。然るに何故他の勇ましいジャムパーは充分滑るスキーを持ち、力強いサツツをするに係らず餘り遠くへ飛ばず、その上立つのに如何に困難するか。非常な力とエネルギーの浪費をしてやつと立ち得るのは何故であるか、を考へて見よう。

遠距離ジャムブに於ては氣体動力學 (Aerodynamik) 上の力の作用が決定を與へるものと云ふ想像が正しいか否かを試験して見る機會を得た。

一九二六年一月十日 Pontresina で行はれた、ジャムブ競技會の際であつた。

Carlson と Willlemier. の飛躍距離と確實性の點で優越して居るのは、何等同僚に比較して良く滑るスキーをはいて居るからではなくて只單に彼等のサツツとフライトの姿勢 (強く曲つた前に傾いたスタイルに) とによるものである。

この觀察の結果 Wengen (Schweiz) のスイススキー競技會で速度とフルーグバーンの測定によつて問題の根本に進んで行く事が出來た。

先づ最初に次の問題が解かれなければならない。

(一) シャンツェから與へられたサツツの瞬間の速度で、最も遠い飛躍距離と着陸の際最も少い壓力 (Druck) を生ずる様なフルーグバーンは如何なるものか、換言すれば現在の力量を可及的經濟的に飛躍距離に置き換える様なフルーグバーンとは如何なるものか。

(二) ジャンパーが上記の如きフルーグバーンを描く爲めには如何に振舞ふべきか。

(三) 總ての飛躍距離に對してランディングバーン (着陸斜面) が出来るだけフルーグバーンに適應する爲めにはランディングバーンは如何なる形が良好なりや。即ち降下角 (Einsturz-Winkel) が最小である様なランディングバーンは如何なる形なりや。

ジャンプは二つの種類に分け得る。それは、彈導學的のジャンプ (Ballistischen Sprunge) と、氣体動力學的のジャンプ (Aerodynamischen Sprunge) である。前者は古くよりあつたジャンプで此れはむしろ遠距離ジャンプよりも深降飛躍 (Hief-Sprunge) であつて飛躍速度は通常二〇秒米以下である。此のジャンプでは質量と重量と速度が役をなすもので空氣の抵抗は遲速作用に比して此の速力内では唯飛躍距離ミフルーグバーンに影響を有するだけである。其の爲めにフライト中の身体の位置もスキーの方向もフルーグバーンの形には何の意味もない。注意深い觀察者は此のジャンプではスキーの前を立てて、少し身体を前に傾けると、スキーの先端を押し付けて強く前に傾けてするジャンプと同じく遠く飛ぶと考へるであらう。更にサツツの力強きは遠距離ジャンプに効果を與へるものと云ふ事も見た。兎に角彈導學的のジャンプでは其の効果は何よりも第一に力強いサツツにあるので、スキーの進め方と身体の位置は飛躍距離に關しては第二の役をなすものである。(Dr. Baader, Lanener, Schneider, Birtsch, usw.)

アプローチの速度が非常に早い遠距離ジャンプでは前記のジャンプとは全然異つて居る。サツツの時は速度が二二秒米以上で最近の遠距離飛躍臺では五〇米以上の飛躍距離にも達せられるが、實際に表はれる空氣の抵抗は遲速作用に對して

大きな影響を及ぼす。即ち明かに空氣の抵抗は速度の二乗に比例して大なる作用をなすものである。これからの研究ではスキューはフルーグバーンにあると假定する。これは高速度ジャンプの際にスキューが最も安定な唯一の位置であるからである。氣體動力學によると降下角 α 、速度 V 、を以つて空中を運動する鳥の縦斷圖(Enfil)に於いて空氣の反作用 R が起る。

此の R は浮力 A と、運動に反對に作用する抵抗 W とに分解される。 R は支持面(Tragfläche)の面積 S と速度 V の二乗と支持面の幾何學的形狀によつて一定なる因子 K に比例するものである。一定の降下角 α なら次の如く書き得る。

$$R = K \cdot S \cdot V^2$$

$$A = R \cos \varphi$$

$$W = R \sin \varphi$$

R と φ は降下角 α と共に變化する。故に A 及び W も α と共に變化する。實驗室の實驗(Enfil, usw.)によりて多くの側面圖に對して降下角 α に關係しての大小と位置が決定される。 A は飛躍する物体の重力に反對に作用する。換言すれば浮力である。 W は前進速度に反對に作用する力、即ち飛行速度にブレーキをかける力である。故に A を出来るだけ大とし W を出来るだけ小となす。即ち $\frac{A}{W}$ が可及的大である場合が調べられなければならない。

(此處ではEnfil氏の研究による事による。Recherches Sur la resistance de l'air et levation faites au laboratoire. d'Autentil)

研究の結果によれば降下角 α に於て $\frac{A}{W}$ の極大は平均 ± 10 度の場合である。氣體動力學の效果は更に遠距離飛躍に

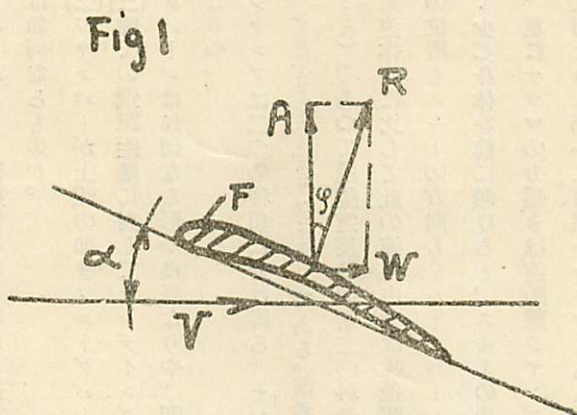


Fig 1

於てよくあらはれる。二二—三〇秒米の速度に於ては弓型になつた型はあまり彎曲して居ない型よりも有効である。そして此小なる彎曲度は、注意深く觀察すれば一人のジャンパーの型に實際的に考へられたる最大フォルラーゲ即ち水平に對して一〇—一五度の前傾によつて與へられた降下角度である。

ジャンパーの身体はうまく既知の飛型にあてはめ得る。そうすれば正しい姿勢の際には適當なる飛型によく似た性質をあらはす。で我々は前記の優秀な結果をジャンパーの上に應用して飛型について先づ始めの根本原則をつくる事が出来る。

前面抵抗即ち速度損失が可及的少く氣體動力學的浮力が可及的大である爲には、ジャンパーの身体は弓型に曲り飛行方向に對して出來得れば約一〇度のフォルラーゲ (Verneigung) 前傾姿勢) 或はそれ以下の角度をこる必要がある。換言すればジャンツェからサツツする際の與へられた速度に於て、飛躍のフルーグバーンがのびるだけ、そしてジャンプが長くなるだけフォルラーゲは強くなるのである。Dr. Baader 氏は、氏の最近著した豊富な挿繪の充ちた書物 *Wunder der Schneeschuhs, Sprunglauf* の中で同じく空氣抵抗の影響と云ふことに觸れてゐる。然しながら遠距離飛躍に存在する氣體動力學的關係を研究することを忘れて居たのである。氏は全く實際の經驗のみから如何に強いフォルラーゲと云ふものが氣體動力學的に都合よきかを書いて居るが、氏は次のことを見逃して居る。それは唯に強いフォルラーゲによつて前面抵抗が輕減されてジャンプが長くなるのみでなく更に重力に反對して働き其ためにジャンプがのびる氣體動力學的浮力と云ふものが主なるものであると云ふことである。

ジャンパーは Dr. Baader 氏の云ふ如く空中に横になつてはならないので、寧ろジャンパーの身体は飛行機の翼の如く空氣の上をすべらなければならぬ。ジャンパーの姿勢が空中に於ける滑面に近づけば近づく程空氣抵抗はより有効に飛躍距離に移換されるのである。現存するランディングバーンでは此ジャンプテクニツクの應用は非常に限られた範圍に於てしか許されぬ。

是等のものは今日にては實施され又 Dr. Baader 氏によつて記載されたジャンプテクニツクが應用されるのである。此

場合には空氣抵抗は氣體動力學的に有効に利用されないで、ジャンプ距離を延長する様には働かずむしろブレーキとして距離を短縮する様に働く。又強いフォールラーゲをとると身体は多くフルーグバーンに直角に稀にはやゝ強く前に傾くこんな空氣抵抗、又こんな大きな降下角度では氣體動力學的の浮力なんかは問題になり得ない。身体は只單に落下傘として働くだけである。制動的に働く空氣抵抗の作用は更にフルーグバーンを地面に向つて強く彎曲せしむる様に働いて、其爲に直線に走つて居たランディングバーンに對して、飛躍距離の増すにつれて大きくなる降下角度と其爲にランディングに於てして壓力が増加して終にはジャンプは最早立つことは出来なくなる。吾々には此過程を一九二六年 Wapen に行はれた瑞西スキー競技大會のジャンプ競技の際に研究した。其結果は此研究の最後に記載されてある。若し猶大きな飛躍距離を得たいとするならば唯ランディングバーンをフルーグバーンに適應さすと云ふことによつて達せられると云ふのはランディングバーンに強い傾斜を與へると云ふことである。然しそれも數字的に言へば三八―四〇度にするを必要とし其範圍を超えてはならないのである。然らば轉倒は危險なものとなる。此新しい長距離飛躍のテクニクは次の如く綜合される。

アブローチ

ジャンパーは深く蹲んで腰をおろし出来るだけ小さくスキーの上に腰をかゞめる重さは強く後方に全足の平にうつす。そして空氣の抵抗面を最小に限定する。此重量分布はスキーの前部に抵抗を除き夫によつて摩擦抵抗を少くする。最も大きい速度を出す此アブローチテクニクの巧妙な代表者は Carlsen, Willenmier である。

サツツ

サツツは深い蹲みから強いフォールラーゲに身体を素早くうつすことである。身体の重量は可及的早く前に投出されねばならぬ。弓型になつた身体の水平線となす角は、シャンツエを放れた直後は一〇度を越えてはならぬ。飛行の最初の時期に於ては空氣が浮力へ移り行くのは降下角度の小さいために最も激烈にあらはれる。故に強いフォールラーゲは出来得

る限り早くとられねばならぬ。矢の様な素早い身体の前進は美しく重々しいサツツの型をあらはすもので多くの審判官達に誤つて唯一の正しいサツツと見られてゐる高飛躍 ホッホスプリング Hoch Sprung とは反對に實にきれいな其上のつたりとした飛行をなすものである。ホッホスプリングと云ふものは、制動的の空氣抵抗に向つて戦つて行くために通常強い矢張制動的の上肢運動をしながら落付かない飛行を起す。

フライト

アブローチからフライトに移るのには出来るだけ滑降方向がサツツによつてくづされない様にやらなくてはならぬ。ジャンプでえがかれた進行路はアブローチから一樣にフルーグバーンに移つて行かなければならない。進行路の上に向つてくづれた即ちホッホスプリングをしたのは大きい高度の飛行と、強く曲つたフルーグバーンと、ランディングの時の大きな降下角度と其爲の大きな壓力と僅かなスタンディングプロバビリティーを意味するものである。

飛行の間はスキーは常に正確にフルーグバーンの中になければならず、其爲スキーは空氣抵抗を生じても僅かで飛行の平衡と安靜とは障害されないのである。身体は強いフオールラーゲに於てしかもやゝ強く弓型に曲けられる。上体は實際可及的飛行の方向に平行に置く、それには飛行中には強く前方に曲けた身体の彎曲が必要である。

ランディングの前には足は前方に上体の直ぐ下に持つてくるが上体にうける空氣の抵抗を大きくするため臀部が高く引上げられる (Thams, Wullenmiyer) 夫によつてジャンパーは容易く強いフオールラーゲからランディングバーンに直角な普通の着陸姿勢をとることが出来る。

評價

國際競技會が力を入れてサツツはホッホスプリングでなくてはならないと切に希望した事、この條文は靜かな遠距離飛躍が充分である所の力學的條件と矛盾して居ると云ふ事をこゝで論及するのは適當の様に思はれる。かゝる條文は全然古臭いもので、ジャムブテクニクと云ふものに一方に偏つて、不當な影響を與へるものである。スキージャムブと云ふも

のは美しいスポーツの行爲であるべきで、危い綱渡りの幾つをも避けつゝ、非常な勢の後にかくの如きものに移轉したのである。故に與へられた走路の状態の下で最大な不倒ジャムプ距離を出したそのジャムプテクニクが最も正しかるべきものである。而しこの最後の要求は次の様な事を必要とする。

(a) 中以下の小ジャムプ距離に於ては拋物線に似たランデングバーンには二秒米の小速度ではホツホスブルング

(b) 四〇米以上の遠距離飛躍に於ては高速度による滑行飛躍 (Gleithug)

正當なジャムプ評價の興味の中に、ジャムプ審判の諸氏を招き入れ彼等の適當な注意をこゝに記し研究されたスキーターテクニクに向けさせる事はあながち餘計なおせっかひには終るまい。審判員が先天的な拒絶をするならば、新しいスキーターテクニクを有効ならしむる事が豫測出来ぬ。事實の關係に全然無智な事を證するものである。

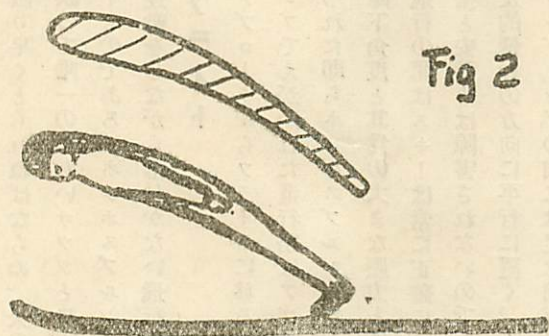
氣體動力學的研究の結果は上述の考と共にスキーター遠距離飛躍では只々に述べたジャムプテクニクが應用される許りでなく更にランデングバーンがこのジャムプテクニクに適應するやうに導くものである。

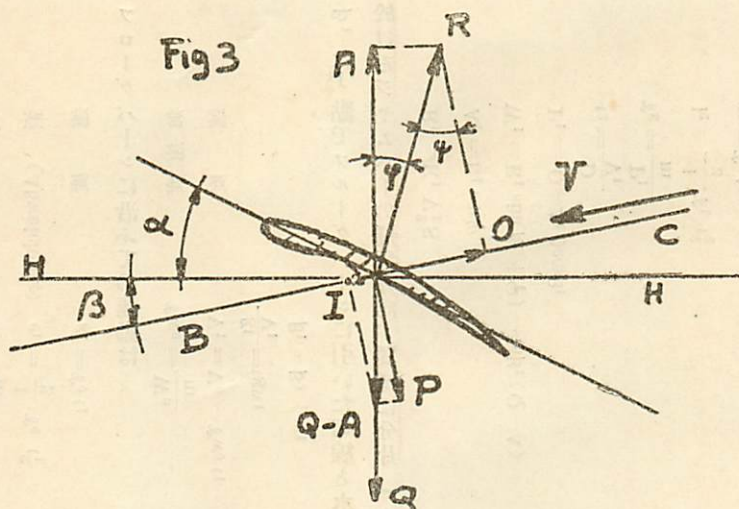
フルーグバーンの研究

先づジャムバーはサツツに於て強いフォルラーゲをなしシヤンツエの稜から引いた水平線に用をなすと考へる。

更にジャムバーがランデングの一寸前迄、この位置を變へないと假定する。この姿勢は全く靜かな調子のとれた遠距離飛躍に一致する。フルーグバーン B₀ 上の適當な點に於て Fig. 3 に圖示する様に力が分解される。水平線を H とし、フルーグバーンの一部 B₀ が H とある角 β をなすとす。更に V をジャムバーの飛行

Fig 2





速度 V 、 Q をその重量、 R を降下角 α に相當する空氣反動の結果とし φ を R の垂線ミなす角とす。垂直に働く力を分けてジヤムバーの重量 Q と浮力 A とにする。更にフルーグバーンに沿ふて働く力がある即ち I と O 、更に P はフルーグバーンに垂直に存する力である。之等は次の如く書く事が出来る。

$$R = K V^2 S.$$

$$A = R \cos \varphi$$

$$P = (Q - A) \cos \beta$$

$$W = O - I = R \sin(\beta + \varphi) - \sin \beta (Q - A)$$

フルーグバーンに沿ふて働く W とフルーグバーンに垂直に働く P とは飛行中 R 及び β と共に變化しフルーグバーンの形を決定する。フルーグバーン算定の爲に之を分片 D に分ける。(Fig 4)

V_0 をサツツの時の速度とする。分片 $O-I$ には次の如く書く事が出来る。

$$R_0 = K_0 V_0^2 S$$

$$W_0 = R_0 \sin(\beta_0 + \varphi) - \sin \beta_0 (Q - A_0)$$

$$A_0 = R_0 \cos \varphi$$

$$P_0 = (Q - A_0) \cos \beta_0$$

フルーグバーンの彎曲はフレ (Abweichung) e の算定によつて起る。(Fig 5)
 m をジヤムバーの質量とすれば

$$\text{飛行時間 (Flugzeit)} \quad t_1 = \frac{D}{V_0}$$

$$\text{加速角度} \quad \phi_0 = \frac{P_0}{m}$$

$$\text{歪 (Abweichung)} \quad e_1 = \frac{1}{2} \phi_0 t_1^2$$

$$\text{速度} \quad g_1 = \phi_0 t_1$$

フロートバーンに於けるこの運動は

$$\text{加速角度} \quad \phi_w = \frac{W_0}{m}$$

$$\text{速度} \quad V_1 = V_0 - \phi_w t_1$$

$$\frac{g_1}{V_1} = \frac{g_0}{V_1}$$

$$P_1 = P_0 + W_1$$

P_1 は I_1 點でフロートバーンに引いた切線と水平線 H となす角、 $H-I_1$ 線は速度 v_1 の合力の方向である。即ち I_1 點に於けるジヤムバーの飛行方向、同様に分片 $I-II$ も計算される。

$$R_1 = K_1 V_1^2 S$$

$$A_1 = R_1 \cos \varphi$$

$$W_1 = R_1 \sin(B_1 + \varphi) - \sin P_1 (Q - A)$$

$$P_1 = (Q - A_1) \cos B_1$$

$$t_2 = \frac{D}{V_1}$$

$$\phi_2 = \frac{R_1}{m}$$

$$t_2 = \frac{1}{2} \phi_1 t_2^2$$

$$g_2 = \phi_1 t_2$$

$$\delta W_1 = \frac{W_1}{m}$$

$$V_2 = V_1 - \delta W_1 \cdot g$$

$$\frac{E_2}{V_2} = 1.5 W_2$$

$$B_2 = B_1 + W_2$$

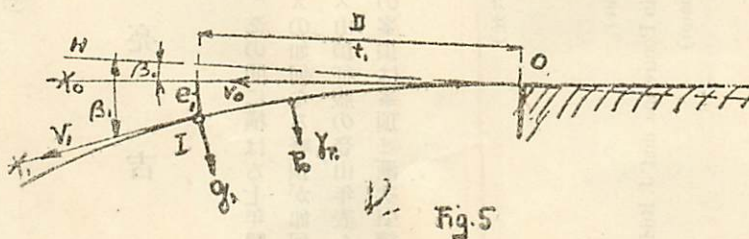
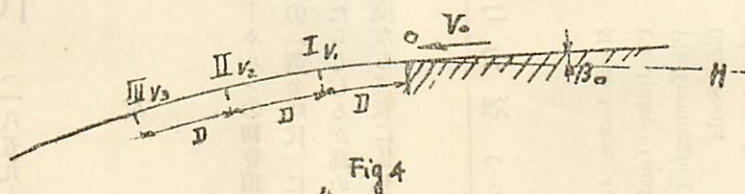
次に来る分片の計算は皆同じ型にあてはめ得る。然して各の分片が計算さればフルーグバーンは Fig. 5 によつて組立られる。 V_0 は與へられたアブローチから計算される。D は前記の型によつて計算して得たものを取る。更に

$$D_1 V_0 \quad e_1 e_2 e_3 e_4 \text{ usw.}$$

$$B_0 B_1 B_2 B_3 B_4 \text{ usw.}$$

水平線と B_0 の角をなすシヤンツエの線 O から O—X 線を引くこの線の上に D を取り OY₁ とする。Y₁ 點で OX₀ に直角に距離 e_1 を取る。かくしてフルーグバーンに I 點をつける。I を通り B_1 角度をとつて線 X₁ を引く、この線上に D を取り、IY₂ とす。Y₂ に於てそれに直角に e_2 を取りフルーグバーンの II 點を得る。II を通り B_2 なる角度をもつて X₂ 線を引くかくして順次にフルーグバーンの各點 I II III 等を得る。

この點を通じて畫かれた曲線はジャムバーの飛ぶフルーグバーンと一致するものである。(未完)



登山史上の黄金時代

(一八五九—一八六五)

大 島 亮 吉

西紀一千八百五十九年より一千八百六十五年(即ち彼のマッターホルンの初登頂せられし年)迄の間に横はる七年間を以て登山史家は是れを『登山史上の黄金時代』と稱す。今爰に此の『黄金時代』に於てアルプスの如何なる峰頂が如何なる登山者に依りて最初に其の頂を踏ましたかと謂ふ事を一目瞭然たらしむるが爲め左にアルプス山頂征服の登山年表を作りて見んか、如何に其の當時の熱然なる登山者等の敢爲にして不撓なる挑戦に依りてアルプスの峯頂は峯頂ニ漸次引續きて夏毎に彼等の足下に踏まれ行きしかを察知するを得ん。

『黄金時代』登山年表 (一八五九—一八六五)

(括弧内の氏名は該頂の初登山者を示す。)

1859

- * Grivola (John Ormsby, R. Bruce)
- Rimpfischhorn (Frank, Horace and Lucy Walker)
- Grand Combin (M. Deville)
- * Aletschhorn (F. F. Tuckett, J. J. Pennen)
- * Bietschhorn (Leslie Stephen)

Monte Leone (J. J. Wellmann)

- Piz Julier (Landmann Scharz in Pontresina und J. Küti)
- Piz Tremoggia (J. J. Wellmann)
- Bizzo Stella
- Pizzo della Duana
- Rainerhorn

Hochalmspitze

1860

- * Grand Baradis (J. J. Cowell, W. Dundas)
- * Grande Casse (William Mathews)
- * Signal du Mont Iseran
- * Chateau des Dames (W. Jacomb)
- * Alphubel (Leslie Stephen)
- * Blümlisalphorn (Leslie Stephen)
- * Oberaarhorn (Leslie Stephen)

1861

- * Monte Viso (William Mathews)
- * Aiguille and Dôme de Polset (William Mathews,
F. W. Jacomb)
- * Doravidi Sud (William Mathews, F. W. Jacomb)
- * Mont Pourri (William Mathews, Michel Croz)
- * Dôme de la Sache (William Mathews, F. W. Jacomb)
- * Mont Gele (F. W. Jacomb, J. B. and M. Croz)
- * Weisshorn (John Tyndall)
- * Nord End of Monte Rosa (Edward North Buxton)
- * Castor (William Mathews, W. Jacomb, Michel Croz)
- * Lyskamm (Frederick Hardy, Prof. Ramsay, Dr. Sibson,
T. Rennison, J. A. Hudson, W. C. Hall, Charles
H. Pilkington, R. Stephenson)
- * Gross Schreckhorn (Leslie Stephen)

* Gwächtenhorn

Piz Segnes

Pizzo Calogione

Piz Grisch

Fluchthorn (J. J. Weilenmann)

Wildspitze, higher point

1862

Pointe de Charbonel

- * Dent Blanche (T. S. Kennedy, Wigram)
- Lo Besso (B. Epinay, J. Vianin)
- * Täschhorn (J. S. Sewelyn Davies, J. W. Hayward)
- * Gross Fiescherhorn (A. W. Moore, H. B. George)
- Weisse Frau (Edmund von Fellenberg, Dr. A. Roth)
- * Monte della Disgrazia (Leslie Stephen)
- Gross Doldenhorn (Edmund von Fellenberg, Dr. A. Roth)

1863

- * Grandes Rousses, N. peak (William Mathews,
G. S. Mathews, T. G. Bonney)
- * Granta Parey
- * Pointe de Tanneverge
- * Dent d' Herens (Hall, Grove, Macdonald, Woodmass)
- * Diablons (Sedley Taylor, Whatman)
- * Parrotspitze, Monte Rosa (Macdonald, Grove, Woodmass)
- * Balfrin (Rob. Spence Watson, Cattin)

- Silberhorn (Edmund von Fellenberg, Karl Bädecker)
 Schlossberg
 Basodino (P. Josi, Zanini, Gaud. Padovini Gio.
 Padovini, Pietio Scuella)
 Helsenhorn (J. J. Weilenmann)
 Biefertenstock (Dr. A. Roth, G. Sand, Raillard stähelein)
 Claridenstock (Dr. Eugene Rambert)
 Selbsanft
 Piz Zupo (Lehrer Enderlin, Pfarrer Serrandy,
 Jäger Padrutt)
 * Piz Roseg, lower point (E. S. Bircham)
 Piz Canbrena (Dr. Krüzemann)
 Zuckerhütl
 Antelao
 Tofana, central peak
 1864
 Cima dei Gelas (Count Paul de St. Robert)
 * Pointe des Ecrins (A. W. Moore, Horace
 Edward Whymper)
 * Punta Rosa. Grivola (Sedley Taylor, Hugh de Walker,
 Eellevberg Montgomery)
 * Grande Motte
 * Aiguille D' Argentière (Edward Whymper, Adams-Reilly)
 * Aiguille de Trélatête (Edward Whymper, Adams-Reilly)
- * Aiguille du Tour (Heathcote)
 * Mont Dolent (Edward Whymper, Adams-Reilly)
 * Zinal Rothhorn (Leslie Stephen, F. Crauford Grove)
 * Bouquetin
 Punta di Fontanella
 Pollux (Jules Jacot)
 * Balmhorn (Frank, Horace, Lucy Walker)
 Fleckistock
 Berglistock (Prof. Aeby)
 Studerhorn (Gottlieb Studer, R. Linth)
 Gross Wannehorn (Gottlieb Studer, Rudolf Linth)
 Ochsenhorn (Edm. V. Fellenberg)
 Ofenhorn (Edmund von Fellenberg)
 * Vogelberg (Frederick Morshead)
 * Gross Ruchen
 Piz Sol
 * Monte Sissone (Douglas Freshfield,
 Horace Walker, Beacherof)
 Piz Kesch, higher point (J. Coaz)
 Hoher Riffler
 * Königspitze (F. F. Tuckett, E. and H. Buxton with
 Christian Michel, Franz Biener)
 Monte Cevedale, lower point (M. von Mogsisovics)
 Monte Vencrocolo

- * Presanella (Douglas Freshfield, Beachcroft,
Horace Walker with F. Devouassoud)
- Adamello (Lieut. Julius Payer mit C. Caturani)
- Marmolata (Paul Grohmann)
- Sorapiss (Paul Grohmann)

1865

- * Tsanteleina (R. C. Nichols, T. Blanford, E. P. Rowsell)
- * Petit Mont Bassac
- * Aiguille Verte (Edward Whymper)
- * Grandes Jorasses, lower point (Edward Whymper)
- * Aiguille de Bionnassay (E. N. Buxton,
F. C. Grove, Macdonald)
- * Matterhorn (Edward Whymper, Charles Hudson, Lord
Francis Douglas, Robert Hadow, with Michel
Croz, Taugwalders)
- * Ober Cabelhorn (A. W. Moore, Horace Walker)
- * Grand Cornier (Edward Whymper)
- * Wellenkuppe (Lord Francis William Bouverie Douglas)
- * Triflhorn (A. V. Wattenwyl, Mitglied der Sektion
Diablerets des S. A. C.)
- * Pigne d' Arolla (A. W. Moore)
- Mont Blanc de Seilon (J. J. Weilenmann)
- * Ruinette (Edward Whymper)
- Pointe de Rosa Blanche (J. J. Weilenmann)

- Gross Grünhorn (Edm. V. Fellenberg)
- * Lauterbrunnen Breithorn (Edm. V. Fellenberg,
Hornby, Philpott)
- * Tschingerhorn (Ein Engländer)
- Stucklistock
- * Gross Nesthorn (H. B. George, Mortimer)
- Dammastock (Hoffmann, Burckhardt)
- Piz Medel (Gottlieb Studer, Jules Jacot mit
Peter Sulzer, Virgil Pali)
- Ringelspitze
- * Piz Roseg, higher point (A. W. Moore, Horace Walker)
- Piz Umbrail (J. Coaz)
- Crast' Agüzza (J. J. Weilenmann, J. A. Specht)
- Piz Pisoc (Herren Flury und Marug)
- Piz d' Acla (Pontresinaführer Peter Ienny und Alex. Flury)
- Gross Piz Buin (J. J. Weilenmann, J. A. Specht)
- Silvrettahorn (Jules Jacot)
- * Punta San Matteo
(F. F. Tuckett, D. W. Freshfield, G. H. Fox)
- * Pizzo Tresero (F. F. Tuckett, D. W. Freshfield, G. H. Fox)
- Monte Cevedale, higher point (Julius Payer mit
J. Pinggera, J. Reinstadler)
- Finailspitze
- Hochvernagtspitze
- Ruderhofspitze

Wilder Preiger

* Mösede (F. F. Tuckett, D. W. Freshfield, G. H. Fox)

* Carè Alto (Sedley Taylor, Hugh de Fellenberg)

Hochfeiler (Paul Grohmann)

Montgomery)

Monte Cristallo (Paul Grohmann)

* Cina Tosa (John Ball, W. E. Forster)

Monte Coglians

以上の登山表中山名の頭首に*印の附せられたる山頂は英國登山者に依りて初登頂せられしものなり。洵に此時代は英國登山者の最も活躍せし時代にして、一千八百五十九年には十二座初登頂せられし中英國登山者に依りて登られしもの四座、一千九百六十年に於ては七座初登頂せられしが其全部は英國登山者に依りしものにして、一千八百六十一年に於ては十六座初登頂せられて、其中十一座は英國登山者に依りて峯頂を踏まれ、一千八百六十二年は餘り振はず僅か八座のみ初登頂せられ、其の半数なる四座は英國登山者の登る所なり。一千八百六十三年に於ては廿座初登頂せられし中八座が英國登山者の登る所であり、一千八百六十四年に於ては卅二座初登頂され、其中英國登山者の初登頂の名譽を得し峯頂は十六座に達せり。而して此の『黄金時代』の最後の年なる一千八百六十五年に於ては流石目覺しきもの有りて、此の年を以て殆んど全アルプスの主たる峯頂は初登頂し盡されし觀あり。即ち同年に於ては四十一座の多くが初登頂せられ、其中英國登山者の登頂せしものは廿二座に上る。斯く程にアルプスに於て初登頂の數多き年は此の一千八百六十五年より他に觀るを得ず。

附記

『黄金時代』の登山年表作製に當りては、其の山名のみを表はクローリツナ (Rev. William Augustus Brewster Coolidge 1850—1921) 著『The Alps in Nature and History (1908) 附表第二の『登山年代表』(Chronological List of the principal peaks in the Alps arranged according to the date at which they were first conquered.) に依據し、其の初登山者名は些か筆者の意を致して諸著を涉獵せし結果のものなるが、就中主たる文献は凡そ左の諸著なり。

1. Gottlieb Studer; Ueber Eis und Schnee. Die höchsten Gipfel der Schweiz und die Geschichte ihrer Besteigung.

- 1869-1871 第三卷附錄 Zusammenstellung der 3250m übersteigenden Höhlen der Schweizralpen.
2. Rev. W. A. B. Coolidge; Swiss Travel and Swiss Guide-Books. 1889
3. John Ball; Alpine Guides, vol. 4, new edition.
4. F. F. Tuckett; A Pioneer of the Alps, Diary and Letter. 1920.
5. Dr. Heinrich Düb; Die ersten fünfzig Jahr des Schweizer Alpenclub.
6. A. L. Mumy; The Alpine Club Register 1857-1863. vol. 1 1921. & vol. 2. 1864-1876. 1925.
7. Rev. W. A. B. Coolidge; Alpine Studies. 1912.

スキー映畫「雪の樂園」

好い雪の處で、美しいバツクを利用して思ふ存分スキーを撮して見たい。そして多くの人達にその楽しさ、愉快さを分ちたい。かうした私共の希望と氣持が、遂に此の寫眞を實現させた。無論學生の仕事であるから筋など作つて劇染たことの出来やう筈がない。最も眞面目な態度で、そして斯道勵の意味で劇的の筋を入れずにスキーテクニクを撮したものである。

全篇二巻に分れて、全長實に二千呎専門家に言はずと實寫物としては大物である。先程完成された北大スキー部のティネ・バラダイスヒュツテを中心にして手稻山の山頂、山腹の美しいタンネンやベチュラの樹永の姿、山頂にカメラを据えて遙か三段、天狗、奥手稻、朝里、余市の諸連峯を望んだ大觀、さては飛行機上より鳥瞰したる冬の手稻諸連峯、札幌兩都市そしてその郊外の風景等、まことに手にとる如く冬の輝しい太陽の下で鮮明に撮し出されて居る。

スキーテクニクは是等の美しい景色をバツクに手稻の山頂、山腹でスキーの第一歩から、廣い範圍に涉つて活用的に撮してある。更に競技的専門テクニク即ちテイスタンスリーステクニク、ジャムブテクニクなどは、何れも解説的に撮影したものである。

此映畫は二月中旬中に札幌で本會主催で一般に公開する豫定になつて居る。

獨逸に於けるスキーの言葉

伯 林 ジョン・シュナイダー

本 田 治 吉 譯

(自分は原著の意味の氣分を損ねずに紹介出来ない事を恥ずる次第です。従て文章そのものに忠實に譯述出来なかつたと云ふ事を御断りしておきたいと思ふ。尙日本の言葉にしては却つて氣分が出ぬ所は原文そのまゝをのせて、次に直譯的説明を付して本當の氣分と意味は讀者に於て御考案下さらん事を願つておく次第です。譯者)

一九二四年オスロー(Oslo)に於て開催された國際スキー會議に於て、國際的スキー語字典を作つてはと云ふ議が出て、滿場一致で採用といふ運びになつたのである。そして之の字典は凡てのスキーテヒニイクに關する表現を種々の言葉を借りてせんとするものであつた。然し不幸にも世界大戰の結果之が完成を見る事が出来なかつたものである。丁度戰爭が終つた後自分はゴムペルツ氏の意見を採用して、單にスキーテヒニイクに限らず、スキーに關係ある事柄を表示するものならば何でも盡く之が言語、語法を網羅

せんま云ふ事を建議して見たのである。何となれば時の變移と共に純テヒニイク的語彙の他に又機智に富める諷刺の語彙とか、婉曲的表現、或は隱語、俚語と云つた風に種々の語彙が、發達展開して行くに違ひないからである。それに又スキーロイフェルのテヒニイク的或は俚語的語音も他の種々の日常語、地方語、通用語に作用されて種々雑多なものであらうから。

之の類集はスキーロイフェル並に運動家から非常な賛同を受けたものである。而して自分が一九一九獨乙スキー團

体 Deutsche Ski Verband の機關雜誌なる "Winter" (ウィン
ヘン) に發表せり。斯かるスキーに關する表現語類集を W.
Schmidkunz 氏が、亦一九二〇年にミュンヘンの山岳雜誌
に "Die Skiläufer Sprache" として増補發表して居る。而
も之等が非常に賞讃と歡迎を受けて非常な賣れ口を見出し
たのである。そしてすでに六年の年月を經過せる今日に於
て尙盛な賣れ口を見出して居るものである。

之の類集中には既に七八の言葉を集めてある。そして
尙之の他日常生活にも必要な常用語が四一五〇〇も含有
されて居る事は注意に値すると云つて良い。

今自分は之の自分の彙集及びシュミットクンツ氏の類集
の中から二三の例を提供し、之の方面の參考と爲し、且つ
日本のスキーロイフェルに日本に於けるシーシユブラツヘ
エ (スキー語) の之に類した或は全く異つた型でも良いが
斯ふした研究をしてほしいと思ふものである。日本に於け
る年報とか、スキー及び他の運動雜誌、或はスキーロイフ
エルの日常語の中には斯かる研究の材料を多く提供して居
るであらうと思はれる。そして自分等は之によつて國際的
スキー語字典を完成したいと思ふ次第である。

我々スキーロイフェルの使用する器具と云へば先づ第一
にスキーである。之の名稱に就て大部分の人は之を *Skif*
Skier (スキー或はスキーエル) と發音する。又之を *Skis*
と書く人もある。然し之の呼び方は正しくない。スキーと
がスキーエルと書く人達はまだ本當にスキーなるものを吞
み込まない入りたての人々か眞のスキーロイフェルではない
と云つて良い。本當の發音は *des of des* (シー) と云ふ。
そして之の綴方は又団体とか地方によつて異つて居る。例
へば *Deutschen Ski Verband* の會員達は主に *Skis* と書き、
Deutsche & Österreichischen Alpen Verein の人達は反對に *Skif*
と書く。

一九世紀頃、北方から我々の方にスキーがまだ流行して
來ぬすつと前に、すでに我々の方には獨逸式表現法の *schne-*
escheln なる言葉があつた。然しその時の感じは今の所謂
スキーに對する様な感じではなかつた。而し之が實際的表
現を見出す可く十九世紀の九十年代から研究されて來て居
るものである。

このスキーなる名稱に對する種々異なる表現があるが、
之を今列擧すれば次の如きものである。即ち

Schleifen (薄板) Schienen (料) Schreitschuh (大股に歩く靴)
Schneebretter (雪板) Langen Fussbrettern (長き足板) Balken
(大材) Krümmen Holzbogen (曲す材) Schneesohlen (雪靴)
Gleit Schneeschuh (滑走雪靴) Schleifschuh (曳き靴)
Schneegleitschuh (雪滑靴) Holzschneeschuh (木材の雪靴)
Hickorysprungbrettern (ヒッコリー飛躍用材)
と云つた風な言葉がある。尙又俚語として

Brettern (板) Latten (條板) Hölzer (材) Planken (厚板)
Klingelsohlen (翼板) Schwallinge (スノエール地方で使用さ
るゝと云ふ。) Lange Holzpannen od. Holzpannoffeln (Pant-
offeln 上靴、北獨逸にて使用) と云ふ風な言葉がある。

昔時北ドイツの地には、舟を呼んで “Schneeschuh der
Meers,” と云つた。そしてこの舟の帆はスキーの帆 (セイリ
ングの時使用するものならん) と比較されて居た。シユミ
ツドクンツ氏は之を Schneerisser (雪橇) と説明して居る。

尙斯く一部は基礎的語として、一部は文法語、或は代名詞
的語彙としてめめてくると數限りなくある。即ちスキー材
又は形の種類に對する名稱としても次の如きものがある。

Eschenski (エツシェ材スキー) Hickoryski (ヒッコリー材ス
キー) Eichenski (樺材スキー) Birkeniski (樺材スキー)
Sprungski (ジャンプ用スキー) Langtautski (テニスダンス用

スキー) Nutzski (實用スキー) Sportski (競技用スキー)
Nasenski (尖端のトガリスキー) Telemarski (テレマール型
スキーで尤もフイックで廣く使用して居る。)

Lilienfelder of Alpen Ski (Lilienfelder Nieder Oesterreich
の Zdanek 氏の住地から來れる名で、氏はノルウェー式の
テビニイックに對するリリエンフェルト式或はアルペン式ス
キーテビニイックの元祖であり且つ賞讃者である) Sommer
Ski (夏スキーで短く少し巾の廣いもので、リュックサツ
クにつけて登山するに便) 尙雨の時等用ひる。眞のスキー
ではないけれど Gumm Ski なる名稱もある。

スキーの次にはシュトックである。其他ビンドウング等
に對する名稱をあければ、即ち Ski Stöcke, Ski Stäbe (杖)
Skihindungen 等無數にある。尙其他 Skifabriken, (スキー
工場) Skierzenger, (生産者) Schneeschulsaison (スキー期)
Ski Versammlungen of Skilagungen (スキー集會或は會議)
(之の集會は所謂スキーヤーの集りでなくスキーロイフェ
ルの集りを意味するものである。) Skikonferesse (會議) Ski
parlamente, (議會) Ski Klubs (之には面白い名稱を有する
クラブがある。例は “Skihelli, なる名を持つたクラブの如



上ホロカメトツク山

和 辻 廣 樹

か) Schneeschuhklub, Schneelauf, Klub, Skivereine. (獨乙の一スキー団体で10000の團員からなつて居る) Skiwelt Skikipäste (之はローマ教徒からなるものでスキーラウフに對する凡ての法則規定を知り之を嚴守するものである獨乙には $\frac{2}{3}$ はプロスタント教會徒^一はカトリック教會徒がある。)

又スキーロイフェル間にはこんな言葉が流行つて居る。 Skilimmer mit dem Skigott Ull od Ullr 及び Skigottin, Skada od. Skadi と云つた様な言葉。

理想的な滑走場となると多數の Skiläufer. (雪男) Schneeläufer Skifahrer, Schneeschuhläufer, Schneelern, Bretthitpfern (ジヤムバーの意味で Schwarzwald の人々を云ふ。) Schneehühner (此處ではスキーロイフェルを雪の上に住む或る種の鳥類に比較して居る。) Skisport Jungen (若者) Jungen des ull & der Skada と云つた風の人々、更に Skilehrer (教官) Skimeister (マイステル) Ski-Veteranen (スキー老兵) Skigiger (伊達男) 意氣な着物を付けたオーストリア人の意) Eitler (見え坊) 特に自分のスキー術をハデに見せて女の目を引かんとする者) 其他 Skidanen

(女流スキー家) 或は Schneefüßchen (可愛愛人) (之をバイエル地方では人々は又 Skibasi) (スキーウサギ) 或は Schneehöhe (ユキノミ) と呼んで居る。 "Die weisse Kunst" と云ふ活動に主役をつとめたシユネーベルゲル (Süneberger) は之の "Schneehöh" なるニツクネームを頂戴に及んで居る。

又よくスキーマンの中には可愛い Skiläufer lieben を連れて Skimmal (田夫) を伴にして山歩きをして、其處に戀を味ふ者もある。然しある一定の組合ニカクラブに屬せるシロイフェルは斯かる事はせぬ。

世界大戦中スキー隊なるものが編成された事を記憶して居る。スキー兵、スキー志願兵、スキー雪中行軍と云ふ風な言葉も我々の耳について居る。而も敵に於ても之のスキー隊に對してだけは互に敵視せず (Feind nicht sehen) 競争者 (Konkurrenz) として見たと云ふ。

スキーと家庭的な生活、スキーと人生とを結びつけて又愉快な言葉を見出すのである。例はスキーの初學者を Skisling (補乳兒) と云ひ、相當の老年で尙孜孜として眞面目に走つて居るスキーロイフェルを Schmalspunigen Skil-

Breite (直滑降の老人) と云ふ。スキー團體の土席をその團員達は Bundes Vater (父) と云ひ、そのフラウは Bundes mutter (母) と云はる。

又スキーミ人体の各部を比較して (Grossen Skizze (趾) Skiferse od. Skihacken (踵) と云つた言葉を見出す。

學校教育方面に關係を持つ言葉としては Skilærer (教官); Skilærereksamen (教官試験) Norwegian, Lilienfelder 式 Anbergsschule フランクライヒにある Normal Skischule (普通學校) Tirol の St. christof による Skipadagogin (教育所、スキー高等學校) Skilærerbuch (スキー滑走教科書) Skikurs od. schneehaufehrgang (實習) Trockenskitkurs と云つた風な言葉。

職業に關しては Skimeister (大家) Skilehring (弟子) と云ふ様な言葉、林務官等には Jägerlärerin schneelanfängerlärerin Skilärerin (遊獵者の通言葉とある) と云ふ風な名がある。醫學的意味を持つ言葉として Skikrankheit od. Skiletitis (スキー病) 之はスキーロイフェルならば誰しも、冬の初めからかゝる病氣で、時には, Skimimmel にまで増悪する。(Fimmel とは常軌を脱して病的に之に興味を有する人に

對する一種の嘲笑的の言葉である。之の言葉の出所は不明である。)

体育的方面に關する言葉として Wenden (回轉) Stemmen (制動) Schwünge (スイング) Sprünge (飛躍) Steigen (登行) 等の言葉。尙 Sprungbretter と云ふ言葉はスキーロイフェル及び体操家の兩方でも使用する言葉であるが、然し其の使用する意味に於て異なるものである。即ち後者に於ては單に高く且つ廣く飛ぶ意味に於て使用し前者に於てはジャムプ臺からとぶ意味を有するものである。

(之の次スキー地の分類と云ふ様な事で二三行あれど意味不徹底で省略す。)

水競技との關係を意味する言葉又は自轉車等に結びつけた言葉も聞く、例へば, Ich schmalle meine Latte unter & sendele 'los, (原語そのまゝ) と云ふ文句や、一時 Skiover と云ふ言葉も用ひられた時がある。そして今すでに忘れられた様なスキーラウフの道具とか、附屬品とか、ビンドウングとか、或はワックスと云つた風を集めて來たら數かぎりなく異つた名稱を見出す事が出来ると思ふ。斯かる名稱は又日本に於ても地方々に依つて異るとか、又様々な名

稱を見出し得る事と思ふ。

又スキーに關する事が國會にまで及んで居る。即ち一八九六年まで獨逸にスキーがさほど廣く及んで居らぬ頃すでに教授家に對する俸給に關する討議があつた時、時の大臣は之をスキーの方面にも論及して之が一般教則の基となつた云ふ。

近頃大臣自身もスキーを好む。前總理大臣 Dr. Luther 及び其他の人々もスキーの當識者である。

スキー滑走、スキー走者及びスキーに關して種々の名稱があると同様に雪に關しても亦種々の名稱がある。例は各雪質、雪の種類に對する名稱の如き。

ツゲルスキー氏の説によると、

- Ballend (にぎれる様な性質の雪) drohend (脅かす)
eisig (氷の如き) fahrbar (滑走に適せる) federpelzig (羽毛の如き) feucht (濕氣ある) feuchtmehlig (濕性粉砂様)
feuchtsalzartig (濕氣ある鹽の如き) fest (硬く密な)
flaumig (軟毛の如き) flockig (細片雪) gelindert (痲痺のつける?) gelroren (凍結せる) gesetzt (固定せる)
glässig (硝子様) glatt (なめらかな) glitzend (輝ける)
hartig (硬き) hart (硬き) klebrig (粘着性) kömig (粒状)

massiv (崖位まで深くてかたい雪) matt (滑走に困難な雪で乾燥せず、それと云つて濕氣の多いと云ふ程のものでもない)
melig (軟粉様) nap (濕氣ある) napmehlig (濕性粉砂様)
napulzig (濕性鹽様) pulverig (粉様) rauhig (赤銅様)
Sandig (砂様) Scharf (するどき) schichtig (層を爲せるもの)
Schlitzig (サケ目のある雪) Schollig (塊よりなる雪)
Schwer (重雪) Singend, Sommerfressen (大陽にとけた雪)
Splittig (片々、木片の如き) Stumpf (鈍き) Stumpoliert (風に吹かれて破かれた様な雪) Tellerbrüchig (盤狀にこわれやすい) Trocken (乾燥せる) Tückisch (意地悪の)
wässrig (水様の) weich (軟雪) wellig (波狀雪) 等々々、
更に pulversehnee (粉雪) Hartschnee (硬雪) Harscht (Harscht od Harsch とは表面不透明に結氷し、たやすく破れ易い、危い表面を有する雪) pappsehnee (紙着性雪)
等云々言葉もある。

‘Schneebretter’, (雪板と譯す可かかん) (即ち急峻な表面の硬い斜面に何か震動があつて、數キロメートルに亘る位の面積でなだれ落ちる雪を意味す)とか Lawine (ナダレ) 等はアルペン等に於ては旅行者等に非常な危険をもたらすものである。

以上は自分の容易くわかる様なものを列べたにすぎない

ものである。その中には "Schneelaufsprach", 中に收められたものも少くない。

願くば日本の友よ、貴方達によつて日本に於けるかゝる研究をされたものを與へられよ。之等の材料を集める事はたいした困難ではない。そして而も今迄さほど注意せなかつた所に以外な收獲のある事に注意されたならば。

シーハイル!!

後記 (譯者)

ジョン・シユナイダー氏は已に周知の如くモデルネ・シー・スホルツの著を以て有名なドイツのスキー大家でありまして現在ドイツの体育大學の助教授をして居らるる人であります。私は此例に倣つてと云ふ譯ではありませんが、日本でも何處か良い中心機關になる様な處で、日本で使用するスキーに關する一切の言葉を何かの形式で、何時かの機會に於て本當に日本式のスキー言葉として(但し必ずしも漢譯に偏せぬこと)制定なり協定なりが出来たならば、大へん結構なことぢやないかと思ひます。そしてマチマチな日本のスキーテクニツクを制限したらどうかと思ひます。

寫眞說明

卷頭に掲げた Geländesprung は在柏林の麻生武治君より贈られたもの。圖中の人物は我々には親しい Hannes Schneider 氏である。これは氏の故郷サン・アントンにて撮影された由、この様な雪と斜面に恵まれた地で生れた氏に依つて始めてあの神技あることは我々等しく首肯することの出来ることである。

又上ホロカメトツク山は十勝岳の南方に隣接して連る奥十勝山脈中の一峰である。

暑寒別岳へ

山口健兒

一月三日 札幌發

四日 増毛―山神小學校泊

五日 暑寒別岳頂上

六日 山神―増毛―札幌

一月の暑寒別岳登攀は昨年が最初であつた。その後をうけて今年出發したのが水戸高校のO先生を加へた總勢八名だつた。昨年は天幕を携帶して露營をなし頂上を極めたのであつたが今度は露營せずに登ることにした。(昨年の登攀記録本誌第五十七號参照)

札幌を汽車が出たのは最夜中だつた。天鹽岳へ登る連中と別れて深川へ下車したときには北國の一月と云ふに軽い雨が落ちてゐた。

深川で眠い盛りの三時間程も待つて、東天がほのかに白みかゝる頃漸く留萌線に乗り、ゴトリ／＼と揺られて廣い雪の原を夢うつゝに眺めて行つたのだ。

今年には氣候が例年になく著しく暖いので一般にとても積雪量が少い。札幌では嚴冬の一月に雨が降つたりした騒ぎだ。従つてこの汽車の窓から見てみるとまるで土の見える所だの、藪の顔を出してゐる様な所だらけであつた。去年の暑寒別岳は雪の多いので苦勞したさうだがこれじや今年には少いので苦勞するのじやないかま心配にさへなる位だ。

留萌を過ぎて増毛の驛については十時頃だつた。異様な風態は漁場町の人々の眼を見はらせる。雲井の爺さんが停車場の柵に倚りかゝり手を振つて迎へて呉れる。そして

一同をすぐに増毛の市街もはづれに近い雲井の爺さんの親戚とかの家へ案内して呉れる。

今日の豫定は増毛から一里半程南方の山の神と云ふ所までである。丁度泊めてもらふ豫定の山の神の小學校の先生が増毛に来てゐる云ふので爺さんは元氣で交渉に行つてくれる。僕達は正月の御馳走を饅腹そこで出されただけ食べた。外はうららかな天氣だ。

先生の承諾を得たと爺さんが歸つて來てから食料を買ひととのへて出發したのは十二時半頃だつた。雲井の爺さんは來て呉れない。もう今年は七十三才で大分弱つて來たからと云つてゐた。そして親戚とかの横井春太郎と云ふのが來て呉れた。

暑寒別川に沿ふて馬橋道を行く。平らな道だ。正面に見える筈の暑寒別岳は見えないで大分西へ寄つて雄冬山あたりの裾が見えてゐるたきりだ。あたりは雪が少く宛然春のザラメ雪だつた。

丁度川が少し西へ折れる所の對岸に岩壁が露出してゐるそれをすぎるとすぐ小學校だ。小學校へはもう知らせが來てゐて先生の奥さんは用意してゐて呉れてゐた。増毛から

一時間三十分位しかかゝらなかつた。すぐに學校の裏から暑寒別岳の尾根のはづれの臺地の上までラッセルをつけに行く。丁度春の融雪期の表層の凍結した雪と同じ様な雪や、淺くたまつて軽い濕氣を持つて居りスキーにベタ／＼つく雪であつた。その上雪量が少ないのでブッシュは五月囃い程出てゐた。兎に角臺地の上まで出て戻る。

學校着三時十分。

夜は教室へドン／＼ストーヴを焚き、思ひがけなく蒲團にまでめぐり合つて安らかに寝ることが出來た。何と云つても明日さへ天氣がよければと皆空を心配すれば透き徹る様な寒天に星は一面だ。天氣には自信のある〇先生のお蔭があるかも知れないと皆はどんなに喜んだらう。

教室で結んだ平安な夢は豫定の四時出發を遅らしてしまつた。用意をして外へ出たときは五時だつた。晴れた夜は大氣がつめたい。月のない夜だつたので星の雫が冴えて凍りついた大地は幽寂な暗の中に擴がつてゐる。

ラテルネを先登に登り出す。昨夜はうすく降雪を見たらしいけれどもその下はカン／＼に堅まつてバタ／＼とスキ

一の衝る音が夜の木精コトマを驚かす。

臺地へ出るまでに相當我々は疲らせられた。臺地へ出た頃は雪も少しは登るに樂になる位あり。夜も白々と明け放れて行つた。時間は丁度小學校から一時間かゝつた。

青い氷の表面を思はせる様な増毛の海が見え、その彼方には北見、天鹽の山々が重なり合つてゐた。

扱てこの臺地は變化なく平坦に續いてゆく、鍼葉樹と潤葉樹の混交林で雪が深ければラツセルの苦勞を想像させるに十分な所であるが何の苦もなく進んでゆく。

暑寒別岳の頂上は雲にかくれて見えないがその西に續く尾根が美しく見える。その間に這入つてゐる雪に埋れた谷の魅惑的なものにはつい知らず見入つてしまふ。

曉に見る空の色、丁度この時見た空の色は實に美しかつた。淡い紫紺へかすかに橙の忍び入つた様な色調、その下に遙か海に近い天狗岳が次第に段がついて薔薇色に浮び上つてゆくのである。我々は暫くは佇つて見られてゐた。

暑寒別岳の右に連る尾根に續くと見えて急に細くなり、左の尾根へ凹凸を刻んで續く狭い脊稜をすぎた頃から急に吹雪いて來出した。それより少し先の風を除けた白樺の林

の中で八時頃飯を食つた。

これから先一〇七五・九米の三角標（標はない）のある地點はすぐ眞上だつたが木がなくなつて風衝りの強いため堅いクラストになつて居り、並ならぬ疲れを感じた。そのために一〇七五・九米へ出たときは九時八分だつた。

風は益々強くなり吹きつける雪は痛い。クラストは最早エツピングも難くなつて來出したので次の瘤へうつるすぐ前でスキーを脱いでそこをスキーデボットにした。九時半すぐ其の場にてクランボンをつけて歩き出す。雪を吹きつける風は西側から骨を刺す様に烈しく衝り、その上霧が次第にかゝつて來て、麓の方は見えるが眼より上は何も見えない。

皆黙々と堅い雪に食ひ込むクランボンの音を味ふ様に煙の様に吹き上る雪の中を登つてゆく。一幅の雄壯な畫だ。暑寒別岳の基部については箸別川ハシノベツ川の上部をまわつて斜めに地圖に於て一四〇〇と數字の這入つてゐるあたりへ出た。これは風に顔が向けられないためにかく斜めに登つてしまつたのである。霧はもはや視界を狭く限つてしまひ風は依然たるものであつたが靴の没する程雪があつたので

急な上りだが樂であつた。

我々は直ちに平らな山頂部の北側へ登り切つてしまひ、磁針で方向を定めて三角點の位置へ進んだ。粒狀に堅く一面に覆ふ雪にクランボンの齒をたて、ゆく内に我々は首尾よく雪にバリ／＼に凍りつかれた槽を見つけることが出来た。時に十一時十分。

四邊は霧と雪に閉された晦暝の底であの札幌に居て遠く海に向ふに眺めた美しい山容を思ひ起させる何等の手がかりもない。天氣であつたら雄大な眺觀に心を踊らすであらう増毛山麓の山々はすべて灰白に塗り潰されて唯烈風に面をむけながらしばらくでも多く登頂の感激に浸らんことを心に思ふ我が共力者達の姿を見るのみだつた。

斯くして尙残る思ひを後に再び舊のコースを下山の途についた。さらば暑寒別岳よ、いつかは又朗らかな顔を見るために訪れるであらう。

歸りは早い、風、雪も物かは、軽い足どりは深い霧の洞の底を目ざして下つてゆく。

スキーデポット着十二時、もうこのあたりでは霧も薄らいで海が見える。振り返れば頂上は尙霧の聖壇の奥深くそ

の威容を収めて鎮つてゐる。唯、風の怒號が傳つて來るのみだ。

そこよりスキーにはき換え一散に下りて行く。併し堅い雪の上の滑降であるから雪が良かつたらと何度轉る度に思つたか知れない。板狀のクラスト、硬雪の連續だ。

十二時十分、一〇七五・九米より大分下つた下の林の中で飯を食ふ。もし今日頂上が出来なかつたら又明日登る豫定で残して置いた色々な御馳走が次から次へと出る。

そこを出發したのは〇時四十分だつた。すぐに平坦な臺地へ出る。臺地では登りの時のスプールに傳つてゆくと勝手にドン／＼スキーが滑つてゆく。もう此處には風も霧もない。唯氣持よい林の中を前方に見える海を眺めながら滑つてゆくのだ。臺地のはづれについたのは一時二十五分だつた。

此處からは一面のブッシュの中や、林の中を亂暴に滑り下りる。雪がガリ／＼なので少し時間はかゝつたが二時には無事に小學校まで歸ることが出来た。

その夜はすべて持つてきたものは皆食べてしまふ。一日の勞作の收獲の楽しい團樂だ。言葉のはづみも軽く靜かに

夜は更けて行つた。

その翌日、こんな日は又とないと小學校の先生の奥さんが云つた程の好天氣だつた。今日が昨日に入れ換つてゐると皆口惜しがつてゐた。

増毛の連山は隅から隅まで輝かしい陽光を浴びて聳えてゐた。我々はふり返り／＼スキーセーリングの出來さうな一面に凍りついたザラメ雪の上を増毛の市街へミ滑つて行つたのであつた。(完)

H. U. S. V. 新着圖書

Spemanns Alpen Kalender, 1927

Spemanns Muskelkurur Kalender, 1927

三高山岳部報告 第五號 三高山岳部

山 稜 第四輯 八高山岳部

前二書は在伯林木原均氏より贈らる。

彙報抄錄

全日本スキー聯盟主催第五回
全日本スキー選手權大會中止

全日本スキー聯盟主催の一九二七年度全日本スキー選手權大會は、二月五・六兩日札幌市郊外に於て舉行の筈なりしが、諒闇中につき謹んで哀悼の意を表し、その開催中止の旨、一月十日公表ありたり。

一月廿九日、山とスキーの會々員有志相集り、故板倉勝宣君、故藤江永次君の思出を語る會を開きて一夕をすごした。

山岳部冬季登山

一月中に於て左記の山々へ登山せり。

天鹽岳及北見峠

芦別岳及上ホロカメトツク山

暑寒別岳

尙二月中に於ける計畫發表せるもの。

ニベソツ山

斜里岳

芦別岳

スキー部行事

手稲山滑降競走 二月二十日

スキー部納會 二月廿七日

美しい雪を求めてアルペンに、グレンデにスキーの快味に耽つてゐる内に早くも諒闇の二月を迎へる様になつてしまつた。我々は今更ながらに烏兔匆々の感を深くしてゐる。

そして又二月の輝かしい青空の下で眞黒な顔を曝して軽い雪の上を縦横に雪煙を上げながら滑りまわる夢を遂つてゐる。

今まで手稲山登山と云へば相當物々しかつたが昨今は日曜日毎に山麓の驛に下車するスキーヤーは數百名の多きに達し、スキー部のヒユツテに一泊と出かける人は時にベットが不足な位である。そして札幌の近郊の日曜日にはスキーで踏みならされてない雪を見かけぬ程の賑はしさである。

各地のスキー界も第一期の喪の明けると一齊に活氣づいて來るであらう。

ジョン、シュナイダー氏の玉稿は特に本誌へ寄せられたもので難解の字が多かつた。

又本號より再び「スキーテクニクの研究」の欄を設けた。今迄の様にあまり堅くならない程度のもを以後續けてゆくつもりである。(健)

のかゝる Viertausender が聳えてる國を南歐などとは小學校の教科書にだつての
つちあるまい)でもそのとうり腰を折る人はどうも似而非なるが多いが遠くへ飛
ぶ人は皆体全体が充分前にかゝつて、所謂 Aero-Dynamischer Sprung の原理に
かなつた飛びかたをしてゐるといつて差つかへなからう。此 Aero-Dynamischer
Sprung については、瑞西の理學士シュトラウマン氏が、昨年度の大會に於ける
ラウエネル^{ラウエネル}と ウイリユミニ^{ウイリユミニ}との同距離の飛躍について二つの異なる Flug Kurve
を示され其を高等數學によつて詳しく説明されてをる。無い知慧をあるといつて
みたつて駄目だ。高等數學なんて言葉を用ふだけでも自分にはちと氣障すぎる。
其は其方面の机上スポーツマンにおまかせして、唯此處には同じく五〇米突以上
を飛んだ彼等の飛躍に於て前者は力強い Absprungによつて体を空中に Schlendern
(ほうり出すとでも云ふか)して後は拋物線を描いて Anfsprungbahn に著するに
後者は Schanze をはなれると同時に Vorlage によつてたくみに空氣の抵抗を利用
してさながら Segel Flug (無發動機飛行機)の様にとでも云へようか遠くへ飛
ぶといふことが、丁度 Thams と Carlsen を論ずる様に Wuillemier, Lauener 兩
人の飛躍が異なる Typisch なものであることを通じて、進歩の楷梯にある故國の
Sprunglauf 界に少しでも役に立てば不肖の務は足るのである。

因に前記シュトラウマン氏の談によれば新設オリムピア Schanze は Theoretisch
には百米突飛べるとのことをも附加へてをく。

— 雪を待つアールベルグにて

師走の二日—

スキーテクニツクの研究

フ ラ イ ト の 話

伯 林 麻 生 武 治

同じ速さでシャンツエを離れたシュプリンガーが何故に飛躍距離の差を生ずるかについて紙上に採用されたかどうかは自分は知らないが、Absprungの如何によるといふことを云つたつもりだ。處が近來シャンツエは益々大きくなるAnlaufは出来るだけ遠くから取るとなるとSpringerの持つ速さは非常のもので、秒時廿米以上といはれてゐる。此速さに對する空氣の抵抗も増すことは無論だ。大なる抵抗に對して体をさへ、安定なLandungの爲に正しい姿勢を保つには充分のVorlageが必要なことも書いた筈だ。唯其續きへThams, Carlsen云々を云つたことがある。其折多忙な廣田兄から懇々手紙を頂戴して御意見もあつた。といふのは取もなをさすThamsとCarlsenのFlug Stilについてであつた。Thamsの空中で腰を折るあの大胆なStilが、VorteilhaftであることはDr. BaaderのSprunglaufの本の中にも述べられてゐるこゝだが、前述の如くSchanzeは大きくなる飛躍距離はべらほうに遠くなるとなるとStyleも變つてくる。當のCarlsenも昨冬Pontresinaで63米飛んだ時などは舊來の所謂Carlsenとはちがつて、むしろThamsの型に近いStyleで飛んだといふことを報じてをきたい。さうすれば成程廣田君の云はれたことに權威がある。Thamsは何といつても斯界の第一人者である、が鶴の眞似する烏の諺、木原さんも云つてをられたことであるが、あのGebwkte StilはThamsがやるから立派なんでもう他の男がやつたんでは？とのお話であつたが、成程中歐(敢て南歐と云はず、ヘルジングフオールスあたりに居る某自稱代表は地理を習つたか、南歐とは普通Citronenの花咲くCôte d'Azur, RivieraさてはCapriからCicilienへかけての地中海岸を云ふのだGletsther

北海道帝國大學スキー部編纂

ス
キ
ー
術
階
梯

御希望の方にお願ひ致します。

改訂増補第三版

定價 金六十錢

札幌

山とスキーの會

自信ある本年度製作品

山とスキーの會



SKI HEIL

スキー
ト

其用具全般

中野商店

スキー印

第一
生産
最大
数量

札幌



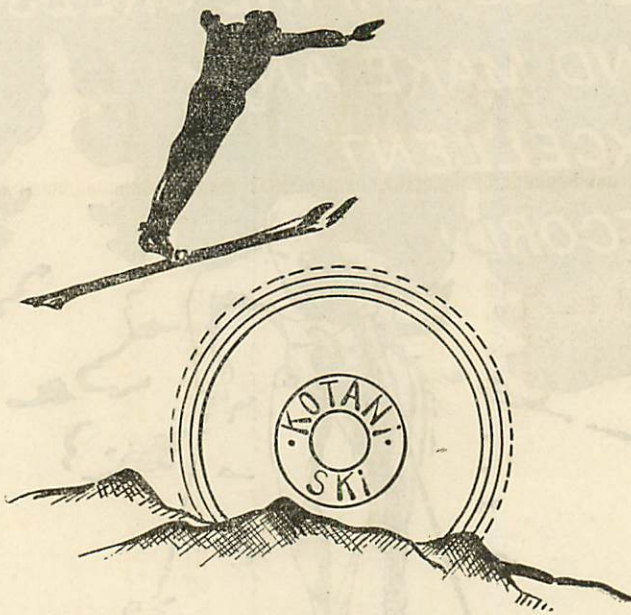
GET SUPERFINE SKEES.
 AND MAKE AN
 EXCELLENT
 RECORD!



具用其ト一キスルナ秀優

小谷 樽 小 具 店

店 具 動 運 屋 梅



の店弊るあ評定るな秀優
 具用ツーボスアタンイウ

市 幌 札

店 具 動 運 谷 小

南 一 條 街 具 店

第二回 青森工業博覧會ニ對シテ

青山温泉

北海の靈峰マツカリヌプリに
連亘するシリベシの山陵
山陵を飾るタンネンホイメと
ブルフェルシユネー
東洋のサンモリツツと
稱せらるる
理想的スキー地！

登山靴とスキー靴

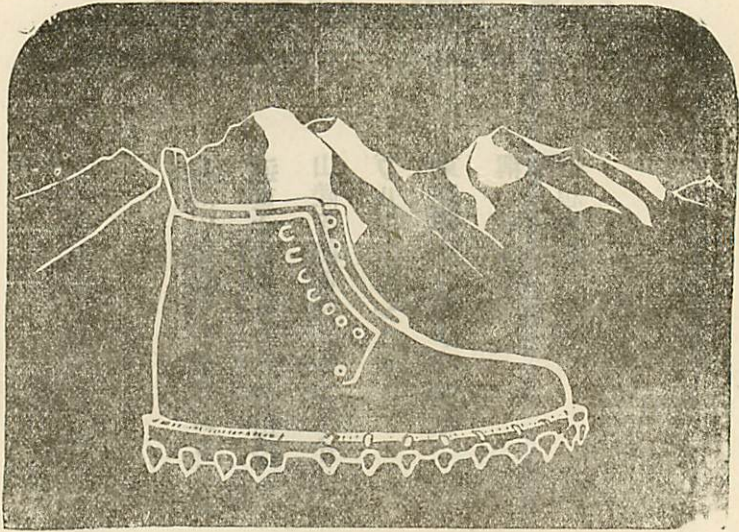
函館本線昆布驛より一里半

札幌より一里五時間
函館より一里七時間

青森県小川町十一番

電話東京六一二五番

テ於ニ會覽博藝工産畜回二第
領受牌金賞等一



靴一キスと靴山登

.....

角目丁四區郷本市京東

店靴屋田太

番二一七四小石川話電

番七二一六京東替振

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下さることを願ひます又印書の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金

あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

昭和二年一月廿八日印刷

昭和二年二月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 山 口 健 兒

印刷兼 發行者 廣 田 戶 七 郎

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北五條西十一丁目二番地

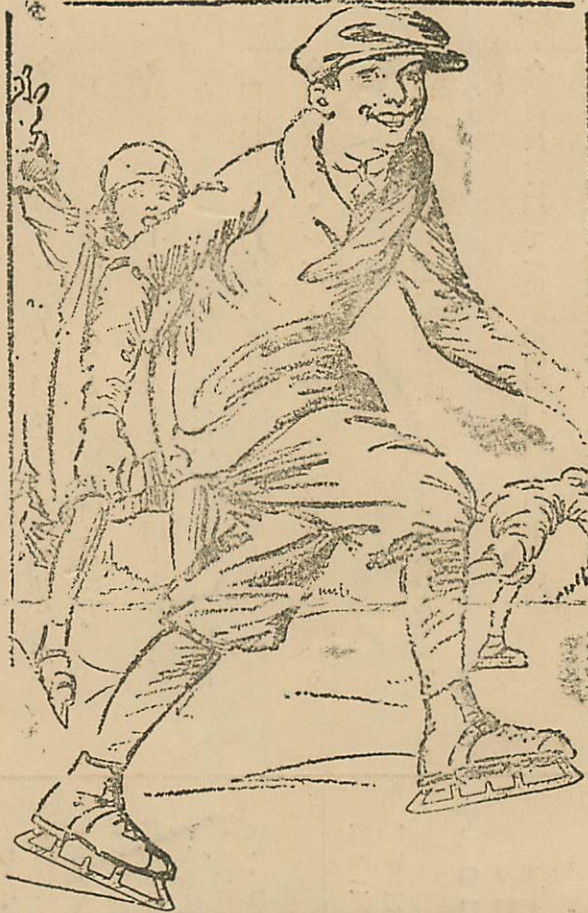
發行所 山とスキーの會

振替口座水欄八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo

No. 69. Februaro 1928. Sapporo, Japanujo.

美滿津製冬季運動具！



— 型錄進呈 —

大正三年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和二年一月廿八日印刷
昭和二年二月一日發行

山とスキ

第六十九號

定價金參拾錢

TOKYO 合名會社 HONGO
美滿津商店

東京・平郷・赤門前・電話・小石川・八四五・二〇七・番